●「赤心」継がん
Dream 五代塾 Sinbun（新聞）
Godai Juku
第8号
発行：Dream 五代塾
吹田市千里山西 5-14-17
発行責任者：理事長　川口 建

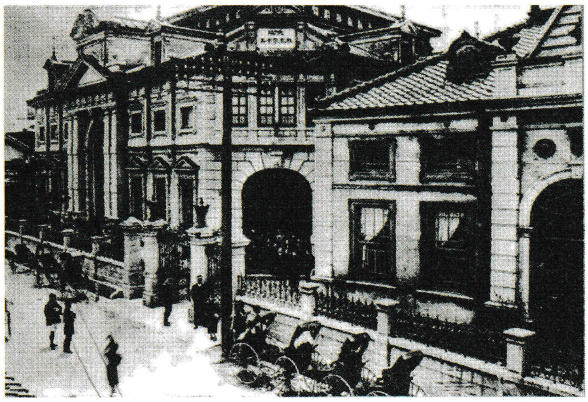
大阪株式取引所と五代友厚

Dream 五代塾顧問
曾野豪夫

大阪株式取引所は、承応元年（一六五二）四代将軍家綱の時代から始まった米（こめ）取引市場を起源としている。幕末維新期の混乱期を経て明治六年、日本最初の株式会社として国立第一銀行が創立され、また堂島米商会所の設立に至る概略は弊紙第四号にて紹介した。

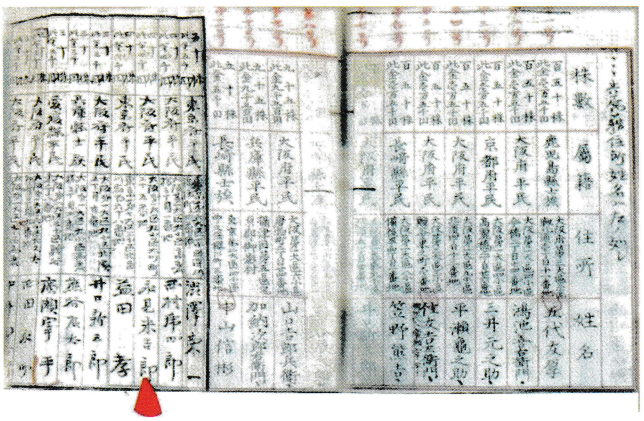
幕末期に伊藤博文、五代友厚、渋沢栄一その他多くの幕閣或いは諸藩の有能な人士が欧米諸国を訪問して先進思想や技術を見分し、学んで帰国した。金融システムもその一つであった。時代が急変して明治の御代に入った。個人営業では各種事業を欧米の如く拡大できないので「合力」つまり株式会社化の必要性が奨励された。

明治七年「株式取引条例」が発布され、東京と大阪に取引所が設置されることとなった。しかし一般的にはまだまだ個人事業主や個人出資者による「商社合力」即ち株式会社の設立は遅々として進んでいなかった。そこで五代ら有志は意見書を付して実施の延期を政府に提言した。十一年新たに「株式取引所条例」が発布され、これを受けて大阪では五代が中心となって大阪株式取引所を八月十五日に花火を盛大に打ちあげて開業した。発行株式数は計二、〇〇〇株。一株の額面は一〇〇円、現在の価値に換算すると約一〇〇万円となり、資本金額は二十億円という壮大な計画だった。



明治期後半に建てられた近代的な大阪株式取引所

株主総数は一三〇人、筆頭株主は五代で、三〇株以上の株主一六人は別掲の通りである。一三番目四〇株（現在の価値で約四、〇〇〇万円）出資者永見米吉郎は私の外曾祖父で、西村馬四郎（三井銀行支配人）と広瀬宰平（住友吉左衛門代人）の二人に挟まれて名を連ねている。頭取適任者の推薦を五代は渋沢に依頼した。五代と渋沢には強いつながりがあったことが分かる。そこで中山信彬（元岩倉具視使節団員）が第一銀行取締役を辞し、東京株式取引所で見習いの上来阪した。株式五〇株を保有した。肝煎（今でいう専務理事）には五代の長崎軍団の一人、私の外曾祖父永見が就任した。長崎軍団とはだれが言い出したかは知らないが、五代が安政四年（一八五七）二十三歳の時に長崎伝習所に習学のため滞在して以来慶応三年まで足掛け一〇年間薩摩藩士として長崎に駐在した期間に知古を得、維新後大阪で五



大阪株式取引所創立株主名簿
筆頭は五代友厚、13番目永見米吉郎

大阪株式取引所創立株主人員姓名便覧～大株設立に貢献した130人（設立当初）～

	株数	出資額	属籍	姓名	出自・業績
1	150	15,000	鹿児島縣士族	五代　友厚	"大阪経済の父""大阪の恩人"
2	150	15,000	大坂府平民	鴻池　善右衛門	鴻池家11代
3	150	15,000	京都府平民	三井　元之助	三井伊皿子家
4	150	15,000	大坂府平民	平瀬　亀之助	第三十二国立銀行（現・三井住友銀行）を設立
5	150	15,000	大坂府平民	住友　吉左衛門	住友家15代
6	150	15,000	長崎縣平民	笠野　熊吉	商社経営
7	100	10,000	大坂府平民	井口　新三郎	第一国立銀行（現・みずほ銀行）大阪支店支配人
8	100	10,000	兵庫縣士族	熊谷　辰太郎	第一国立銀行（現・みずほ銀行）出身の銀行家
9	95	9,500	大坂府平民	山口　吉郎兵衛	山口家当主4代
10	95	9,500	兵庫縣平民	加納　次郎右衛門	嘉納家（本嘉納）当主
11	50	5,000	~~長崎~~縣士族 佐賀	中山　信彬	大阪株式取引所初代頭取
12	40	4,000	大坂府平民	西村　馬四郎	三井銀行支配人
13	40	4,000	大坂府平民	永見　米吉郎	大阪株式取引所初代肝煎（理事）。五代の盟友
14	30	3,000	愛媛縣平民	廣瀬　宰平	初代住友総理人

永見米吉郎・明治16年

代の事業を応援した人々のことを言う。（もっとも一〇年間と云っても上海、欧州出張や鹿児島での藩勤務もあったので実質の長崎滞在期間は八年間位だった。）米吉郎は長崎で代々唐物商や金融業を行っていた永見商店主傳三郎の末弟で、五代より三歳年下だった。

慶応二年、五代は薩摩藩御小納戸奉行となり会計係として藩の商事を長崎の地で掌り、運輸の事業にもあたることになった。米吉郎は藩の汽船開運丸で薩摩～長崎～大坂間の往復に従事するようになり、やがて五代や兄傳三郎の勧めもあって同年大坂に雄飛して居を構え、長崎とも連絡をとりながら銅商や質商・金融業・清朝貿易などを営んだ。鹿児島や長崎で薩摩藩の京都への派兵などの兵站業務を担当していた五代は、慶応三年十二月海路兵庫港に到着し家老新納刑部（にいろ ぎょうぶ）を京都に送り、二十八日モンブラン伯とともに兵庫に投宿した。時あたかも幕府崩壊の最中であった。翌慶応四年一月三日鳥羽伏見の戦い・戊辰戦争が始まり九日大坂城炎上。十一日神戸事件、二月堺港事件と京でのパークス英国公使襲撃事件などを五代は明治新政府の徴士参与職外国事務掛として欧米の総領事と談判して解決に努めた。九月江戸は東京と改称され、元号は明治と改められた。十一月明治天皇はあわただしく江戸に到着され、宮城と呼ばれることとなった旧江戸城に入られた。（敗戦後は皇居と改称された）

維新後十年の歳月を経て明治十一年三月東京商法会議所初代会頭に渋沢が選ばれ、八月大阪株式取引所が開業、九月大阪商法会議所第一回総会が開催されて五代が初代会頭に就任した。「西の五代友厚、東の渋沢栄一」と並び称されている。この言葉は戦後東京大学の土屋喬雄名誉教授が昭和二十九年『日本資本主義の経営史的研究』の中で記述されたのが嚆矢ではないかと思う。取引所開業当初数年間は西南の役後のインフレ期でもあり、また合力商社（株式会社）の存在自体も少なかったので取引所の取引は低調だった。五代が関係した主要産業の設立は十三年東京馬車鉄道（資本金三十万円）、十四年大阪製銅会社（二十万円）、関西貿易社（一〇〇万円、一六年解散）、十五年大阪紡績（二十五万円、社長渋沢、のち東洋紡績）、神戸桟橋（十五万円）、十七年大阪商船（一五〇万円、実際には一二〇万円）、阪堺鉄道（二十五万円）などであった。明治十八年、五代が満四十九で没した翌年から日本の産業はようやく発展期に入り株式市場も上昇に向かった。

大阪株式取引所は現代の急速なコンピューター化の波に抗しきれず、設立されて一三五年目の平成二十五年（二〇一三）株式の現物市場を東京証券取引所に統合し、デリバティブ（金融派生商品）特化型の取引所となり、翌年大阪取引所と名称が変わった。そして令和二年 東京商品取引所の貴金属市場（金現物は除く）、ゴム市場及び農産物・砂糖市場の各商品が東京から大阪取引所に移管されて今日にいたっている。取引所前の五代友厚像は今も大阪取引所の行く末を見守っている。

大阪取引所前の五代友厚像

参考資料
・大阪取引所
・宮本又次『五代友厚伝』有斐閣
・八木孝昌『新・五代友厚伝』PHP研究所
・『兼松六〇年の歩み』兼松株式会社
・永見克也「永見家（永見徳太郎ら）と五代友厚との関係」『船場紀要』第七号

「北海道開拓使事件」五代無実認識を阻む党派的見解

Dream 五代塾顧問　八木孝昌

諸高校日本史教科書が明治十四年の開拓使官有物払い下げ事件について、「政商五代友厚は開拓長官黒田清隆と結託して、破格の安値で官有物の払い下げを受けようとした」という趣旨の記述をしています。これに対して、「五代友厚官有物払い下げ説見直しを求める会」（代表大阪市大同窓会五代委員会児玉隆夫委員長）は、文部科学省に「高校日本史教科書の五代についての誤記述の修正を各教科書会社に指導されること」を要望する文書への賛同署名活動を行いました（本紙第五号参照）。本紙の読者にも署名のご協力をお願いしましたので、この件をご存じの方々は多いことと思います。

この活動に対して、本年二月、同窓会に抗議文がメールで届きました。そのメールは同窓会五代委員会委員の筆者のところにも転送されてきました。

抗議文の内容

今回、同窓会が中心となって行おうとしている文科省への請願（教科書会社への記述変更指導）は、大学構成員かつ同窓生であり、歴史学研究に携わる者としては、強い憤りを覚えざるを得ない。

歴史は、たとえ「イエス」を示す文献史料が発見されたとしても、それが「イエス」なのか「ノー」なのか、果たしてどちらでもないのか、については多角的かつ慎重な検証と研究蓄積とが不可欠である。史料も人間が作成するものである限り、真実を記すとは限らない（たとえその時々の公文書であったとしても）。

五代が関与していないという説が出されたのであれば、それを広く研究者間で共有のうえ吟味し、闊達な議論の俎上に乗せ、時間をかけて検証すべきである。学問の進歩はそういう地味かつ地道な活動に依拠するものである（とりわけ歴史学はそうであろう）。

そのプロセスを経ないままに、拙速に変更を求める（しかも文科省への請願という形で）ことは、最高学府の同窓会が取るべき対応ではないと言わざるを得ない。大学が最も尊重すべき「学問の自由」「表現の自由」さえ脅かしかねない。

強い抗議の意とともに、今回の措置の即時の撤回を求めたい。

一読、愕然とせざるをえない見解です。時の政府が開拓使官有物を開拓使幹部の設立する民間会社に払い下げる決定した政府文書が存在しても、「史料も人間が作成するものである限り、真実を記すとは限らない（たとえその時々の公文書であったとしても）」と主張して、

問題を超懐疑主義の中に投げ込み、五代無実の主張を無化しようとしています。この論法を使えば、歴史教科書は記述不能です。どのような明々白々の資料があっても、一から疑わなくてはならないのですから、たとえば徳川幕府初代将軍が家康であったかどうかについても調べ直さなくてはなりません。「歴史学研究に携わる者」からこういう見解が出されることに暗澹たる気持ちを禁じえません。

歴史学に見られる党派性

歴史をどのように見るかについて、政治的立場によって相違が生じることはしばしば経験することです。しかし歴史理解にそのような党派的立場を持ち込むことは慎まなければなりません。なぜなら、党派的見解は自派の考えを絶対化し、他派の考えを全否定する傾向があるからです。党派的思考は理性を殺します。私見ですが、開拓使官有物払い下げ事件で「政商五代の関与」説をとる歴史研究者には「薩長悪玉・自由民権運動善玉」とする党派的発想が根底にあるように見えます。そうなると、五代無実の客観的資料がどれだけ出てきても「政商五代関与説」はビクともしないことになります。

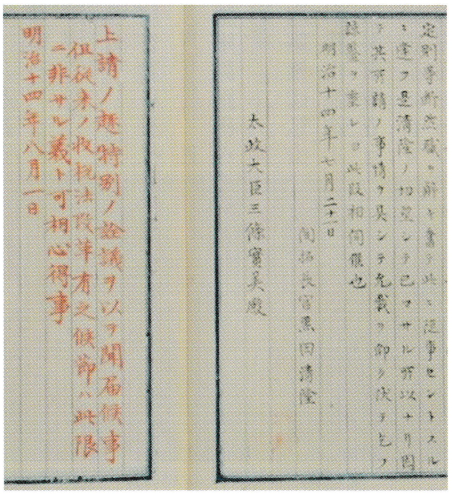
ひるがえって、抗議文を見てみましょう。これが党派的見解でなくて何でしょうか。典型的な「自派絶対化・他派全否定」の立場です。証拠資料を示して提起されている五代無実説には、抗議文の書き手は極端なハードルを設定して退けようとし、他方、高校日本史教科書や岩波歴史年表等に見られる、五代への官有物払い下げという従来説については、それを論証する証拠資料が皆無で、明治十四年七月二十六日付の「東京横浜毎日新聞」の誤報を根拠としているだけであるにもかかわらず、その非論理性に素知らぬフリをしています。

筆者が懇意にしている大阪市立大学名誉教授のI先生に抗議文をお見せしたところ、次のような見解が寄せられました。

私は「素人」ですから、専門家の意見を最大限に尊重してお聞きすると、これまでの通説側がよって立ってきた資料そのものが同じように疑われなければならないことになります。五代の潔白説を取り下げろと言うのであれば、五代悪者説もいったん取り下げるのが正常な感覚でしょうね。

末岡照啓住友史料館研究顧問の新著

この指摘にあるような自派絶対化が長年にわたって五代に濡れ衣を着せてきましたが、他方では通説の誤りを正すそうとする新たな研究成果がさまざまのかたちで世に問われてきています。そして、五代無実を包括的に論証する末岡照啓著『五代友厚と北海道開拓使事件』（ミネルヴァ書房）が、五月中に刊行されることになっています。「見直しを求める会」はこのような流れの中で教科書会社への働きかけをさらに強めることにしています。



【左の画像】
安田定則等開拓使幹部が設立する民間会社に開拓使官有物払い下げを決定した政府文書の一部（開拓長官黒田清隆の三条太政大臣宛「伺」の右上に「定則等」の文字がある。左の赤字は当「伺」が政府によって承認されたことを示す事務局の注記。）

Dream 五代塾セミナー

第５回セミナー　五代友厚ゆかりの地探索②

日時：2022年４月30日（土）10時～13時
場所：御堂筋・四ツ橋筋・堂島浜辺り
案内人：川口建

大阪通商会社・為替会社跡⬇適塾（緒方洪庵舊宅及塾）⬇銅座の跡⬇大阪市立愛珠幼稚園園舎⬇大阪商法会議所跡⬇御霊神社⬇北御堂（浄土真宗本願寺派本願寺津村別院）北御堂ミュージアム入場見学⬇五代友厚旧自邸（現大阪科学技術館）〈碑無し〉⬇薩摩藩中屋敷跡⬇薩摩藩蔵屋敷跡（上屋敷）⬇長州萩藩蔵屋敷跡⬇大阪製銅会社創業の地〈碑無し〉⬇福沢諭吉誕生地⬇蛸の松碑⬇五代友厚精藍所・西朝陽館跡⬇大阪市役所堂島庁舎跡碑⬇堂島米市場の跡⬇五代友厚最後の自邸・弘成館（現日本銀行大阪支店）〈碑無し〉

ゴールデンウィークの中晴天に恵まれ、大阪のシンボルともいえる中之島の大阪市中央公会堂前に総勢20名が集合しスタートした。最初に公会堂のお話から始めますが、大正元年（1912）に建設が決定、大正７年（1918）11月に完成している。建設資金は株式仲買人である一般市民の「岩本栄之助」が大阪市に100万円を寄付、米国の富豪の多くが慈善事業や公共事業に投じていることに感銘を受け、大阪の地にどこにも負けないホールを建設したいとの志を持ち決意した。その後岩本自身は再び株仲間の世界に身を投じたが、第一次世界大戦の影響を受け莫大な損失を出し、原因は定かではないが自宅でピストル自殺（享年39歳）し公会堂の完成を見ずにこの道を選んだという経緯がある。

中央公会堂が建設されるまでは、この地に豊臣秀吉・秀頼・秀長を祀る豊國神社（ほうこくじんじゃ）が建っていた。豊國神社は先の中央公会堂建設のため現在の大阪府立中之島図書館（明治37開館）の西隣（現大阪市庁舎）へ大正10年５月に遷座し、さらに昭和36年１月に大阪城域内に遷座、現在に至っている。

もう一つ説明を付け加えると、中央公会堂の前方（現大阪市東洋陶磁美術館）には「自由亭ホテル」が存在した。明治初期に流行したコロニアル様式の建物で、特に外国人向けの西洋料理兼ホテルでした。起源は幕末に長崎にて「草野丈吉」が開業した日本初の西洋料理店とされ、明治元年（1868）に大阪の川口居留地の近くに「自由亭ホテル」西洋料理兼ホテルを開業（長崎で懇意にしていた五代友厚や後藤象二郎の誘いがあったとも伝えられている）、明治14年にその支店として建てられた。この様に大変興味深い歴史がある。

集合場所・大阪市中央公会堂前

次に興味深かったのは大阪商法会議所跡碑を経由し、北御堂ミュージアム入場見学です（無料）。大阪商法会議所は明治11年

大阪商法会議所跡碑

（1878）に設立し、第一回総会（明治11年９月２日）が西本願寺津村別院（北御堂）で行われた。その記録はミュージアム内の年譜に「別院にて、大阪商法会議所、第一回総会を開催する。五代友厚が初代会頭に選出される。」と記載されていた。

幕末期の北御堂・北御堂ミュージアム内掲示写真より

当時の総会会場は写真のごとく壮大な敷地・建物と想像ができる。一方、建物に面する当時の南北道路「筋」は狭いようで、当時の基本設計は、南北の「筋」（３間・約６ｍ）、東西の「通り」（４間・約８ｍ）と狭く、現在の御堂筋からは想像もつかない狭い道路でした。

商法会議所第一回総会を映画『天外者』で主演の三浦春馬さんが白麻の洋装で蝶ネクタイの五代友厚を演じ、大勢の会議所会員を前に演説をされているシーンがありましたが、当時の第一回総会の状況がよく理解できた。

残念な場所は、現大阪科学技術館（五代友厚旧自邸）で、以前は五代の展示コーナーが設置され、展示物として取壊し前の建物写真、瓦の実物、事績・年譜などが展示してあったが撤去されていた。

現大阪科学技術館

五代が民に下り実業家の時代の全てといって過言ではない大阪再生の歴史が詰まっている場所です。是非復活、あるいは記念碑・説明プレートなどの設置を願うばかりです。

次に薩摩藩屋敷（中、上）跡碑を見学し、土佐堀川、堂島川を渡り五代友厚精藍所・西朝陽館跡碑へ到着。五代の製藍事業は鉱山事業に匹敵する大事業で且つ国益に資する事業であった。五代は鉱山業を精力的に進める傍ら、すでに明治６年（1873）にヨーロッパの藍精製法の導入に着手、翌年には徳島郊外名東郡田宮村に精製工場を設置、工業化試験に取り組んでいた。そして明治９年（1876）には「特許願」「資本御助力嘆願書」を提出し、50万円（30億円前後）の融資を得た。自らも保有財産の大半をつぎ込み、この年に朝陽館を設立した。また10月には次女が誕生し藍子と名付け事業に対する決意の表れでもあった。更に１年後には明治天皇の行幸を受け近代化の先駆けと国益事業の期待の大きさがうかがえる。

現大阪科学技術館前での説明風景

五代友厚精藍所・西朝陽館跡碑

然しながら競争の激化や債権回収の滞りが多額となり設立から６年位で事業閉鎖に至った。この事業の意義は近代化への先鞭をつけた五代の功績は大きいと評価するべきである。

朝陽館は明治15年に閉鎖されたが、その後の跡地利用を辿ってみると、以外？にも五代が志した施設や公共施設として活用されていることが分かる。明治18年に市立大阪商業学校（大阪商業講習所を改む）、明治24年に大阪商業会議所、大正元年に大阪市役所堂島堂島庁舎、現在はＩＴＴ関連企業（電信事業は五代が官史時代に外国資本参入を拒否した経緯がある）が時代に即し建てられている。

因みに、長年の住居とした旧五代邸は大阪科学技術館へ、最後の自邸は日本銀行大支店へとなっている。

参加の皆さんお疲れさまでした。（川口建）

Topics

小松帯刀墓所訪問

2021年11月30日（火）、今日は旅行最終日で日置市の小松帯刀のお墓にお参りすることを計画した。

小松は肝付（きもつき）家に生まれ「肝付尚五郎兼才（かねとし）」といいました。のちに小松家の養子となり（両家とも名門）、また小松家当主清猷（きよもと）が29歳で急死し跡継ぎがいないことから、妹・近（千賀）の夫となり「小松尚五郎」「小松帯刀清廉（きよかど）」へと名を改めた。

小松帯刀の墓石（写真中）
左奥が妻近の墓石

小松は若くして国父（久光）に大抜擢をされ薩摩藩家老に任じられ薩摩藩政の諸難題を解決し、また維新の立役者といっても過言ではない働きをしています。（事績紹介は省略）

小松と五代とは同い年であり盟友の仲でした。小松は36歳の若さで亡くなったが病気療養は京都の屋敷を引き払い、大阪の薩摩掘（大阪市西区立売堀）の借宅で療養した。京都には妾琴と息子安千代・娘須美がおり、小松の看病のため大阪に来ていた。一方鹿児島の本妻近との間には子がいたが幼くして亡くしたため町田家から申四郎（留学生の一人）を養子に迎えていた。のちに琴の息子・帯刀の遺子安千代を養子にした（申四郎は町田家に戻った）。

明治３年（1870）７月18日小松は息を引き取り、盛大な神式の葬儀が行われ大阪天王寺村の夕日岡にその亡骸は葬られた。琴と娘須美は五代が自邸に引き取り面倒を見た。その後琴も明治７年（1874）８月、26歳の若さで亡くなり遺骨は帯刀と同じ夕日岡に葬られた。

明治９年（1876）に小松家の菩提寺園林寺跡、小松家墓所に改葬された。現在も小松帯刀と近の墓が並んで建ち、その後方に琴の墓がひっそりと建てられていた。（川口建）

編集後記

五代友厚がみずからの生涯を振り返って友人に述べた言葉とされる。

『余は生涯決して安逸愉楽を希望せず、且つ天下の資材は決して之を私すべきものに非ず、能く集め、能く散じ、自らの利するも共に益してこそ初めて意義あり、余はたとえ失敗して産を虚しくするも、国家国民を幸福ならしむることを得ば、即ちもって余が望みは足れり』（五代龍作『五代友厚傳』より）

今の日本のリーダーたちに叫ぶ五代さんの声がするように思う。　上記の言葉の中に『天下の資材は決して之を私すべきものに非ず　能く集め　能く散じ、自ら利すると共に人に益してこそ始めて意義あり』この崇高な考えに接した時に現在のリーダーと言われる人々が、このような考えを心しているのだろうかと思う。あまりにも自利に傾きすぎているのではと心配になる。上げた拳の下げる時期、場所を見失い人々を不幸に陥れることがあってはならない。間違った時には訂正することは決して恥ずかしいことではないと。何故人は素直になれないのか・・・（川口由美子記）

Dream 五代塾 HP：https://www.dream-godai.com
連絡先：川口建　携帯：080-4497-5688　Email:gogoken12345@gmail.com